

『海上の森だより』44号掲載文の訂正とお詫び

平成29年4月に発行しました44号掲載の坪井晋吾氏の文章で、表題の「フィールド ポテンシャル」(正)を「海上の森の“フィールド ポテンシャル”」(誤)と、2段落目(6行目)の「生き物調査グループ」(正)を『森の会の「自然環境調査」』(誤)と誤記して記載致しました。このことにより豊田市自然観察の森の話が海上の森の話に置き換わってしまいました。坪井氏には、大変ご迷惑をお掛けしましたこと衷心からお詫び致します。併せて坪井氏の原文を以下に掲載致します。

なお、次回発行の『海上の森だより』45号にも訂正及び謝罪文を掲載させていただきます。このような間違いを繰り返さないため、今後の編集には細心の注意を払って参ります。(編集担当代表・伊藤良吉)

坪井晋吾様の原文

フィールド ポテンシャル

私は長い間森の会調査グループに参加させていただき、主に植物の指導をいただいております。普段のフィールドは豊田市自然観察の森です。この森で、森の手入れ、お客様への案内、生き物調査の各ボランティアグループ活動をしております。

生き物調査グループでは主に植物調査をまとめております。植物相調査をはじめて本年は8年目になります。平成28年の確認種は木本(127種)、草本(241種)(イネ科、カヤツリグサ科、シダ、コケを除く)でした。

地続きであるのに、豊田の森にはない環境が海上の森には存在することを、海上に入るようになって間もなく直感しました。

チャート礫が広範囲に存在し、花崗岩粘土層と礫層の間から湧水がしみだす崖にびっくりしました。この湧水があつまると思われる屋戸川、吉田川の水量は多く、水温も低く感じられました。湧水湿地もあちこちにあることを知りました。

調査を進めるうちに、豊田にない樹種が気になってきました。海上にあつて豊田にない樹種のほとんどが冷温帯性であることを図鑑で知りました。海上28年木本確認種の約9%が冷温帯性で、豊田観察の森には冷温帯性は存在しないのです。

海上の森、豊田市自然観察の森の違いは水環境の差ではないでしょうか。

東海丘陵要素植物と同じように丘陵地の湿地やその周辺など、他の植物が入れない厳しい環境に適応した種が、寒い時代から遺存したのではないのでしょうか。

先日センターの講演会で、40か所以上の湧水湿地が存在し、230種以上の植物が確認されていることをしりました。

これは物凄い field potential(可能性、資産)です。私たちはそのほんの一部しか知りません。保護、保全のためにはチャート礫、粘土の層地質、湧水湿地をもっと良く知って、人々につたえていかなければなりません。フィールド ポテンシャルであることを強く認識し、もっともっと勉強しましょう。

(坪井 晋吾)

訂正とお詫び②

『海上の森だより』44号、8頁の「海上の森の会 活動予定 2017年5~7月」の「木工芸教室5月の活動日」に、「28日(日)」(誤)もあるとなっておりますが、この日の活動はありません(正)ので、ご注意ください。誤った記述をしてしまい、関係者にご迷惑をお掛けしました。深くお詫び致します。